
フェイスチャー

YUI.A

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フェイチャー

【Nコード】

N4247N

【作者名】

YUI・A

【あらすじ】

主人公は両親を亡くし兄と二人で暮らしていた。
両親の命日の日主人公に事件が…。

闇穴道（ブラックホール）

太陽が青年を照らしているようだった。遠くには街が見えていた。

「今日もいい天気だ。」

青年は草原に横たわりながら呟いた。

小鳥のさえずりが聞こえ、風によって草木が音をたてながらなびいている。

心地良い風を受けながら青年はゆっくりと眠りについた。

青年が目を覚ました時は既に夕方だった。

眠りについた時の太陽と変わって真っ赤な夕日が自然と心を落ち着かせた。

青年は立ち上がり街が見える方向へと歩いていった。

「あゝ。今日も何もない一日だった。」

青年はぶつぶつ言いながら空を見上げた。

一瞬何か光ったように感じたが一度目を擦ってからまた見ると何も光っていなかった。気のせいかと思いながらまた歩みを進めた。

街に着く頃には既に夜になっていた。

街の入り口には『ようこそラクティスへ』と書かれた看板が立っていた。

青年はその看板を通り過ぎ中心部へと入っていった。

さすがに中心部ということもあり、夜にはなったが賑わいを保っていた。これから家に帰ろうとしているサラリーマン、立ち話をして

いる女性達、彼氏を待っている女性など様々な人々がいた。青年はそんな中心部を抜け殺風景な街へと進んだ。

出歩いている人はいなく街灯や家の明かりが道を照らしているだけだった。

殺風景な街に入ってから数十分後青年は家に着いた。

青年は家の明かりを付け近くにあった椅子に座った。

すると奥の部屋から物音がして、長身の男が出て来た。

「ルキア帰ってきていたのか。」

青年はルキアという名前らしく、長身の男はルキアに話しかけた。

「今帰ってきたところだよ。」

ルキアは優しい声で答えた。

「兄さんは体が弱いんだから寝てなよ。」

ルキアが長身の男にそう言うのと、長身の男はわかったよと言いながら奥の部屋へと戻っていった。

- 青年の名はルキア・ドレイク。

長身の男の名はダン・ドレイク。

この二人は血の繋がった兄弟で、早くに両親を亡くし二人だけで暮らしてきた。しかしダンは、生まれつき体が弱くルキア便りになっていた。

ルキアはダンが奥の部屋へ入っていくのを見ると、立ち上がり自分の部屋へ行きベッドに寝そべり、考えごとを始めた。

気が付くと朝になっていた。鳥達が鳴きあい朝を告げている。

ルキアはベッドから起き上がり部屋を出た。

「ルキアおはよう。」

ルキアが部屋を出るとダンが朝食を作っていた。

「兄さんどうしたの。いつもこんな事しないのに。」

ルキアはとても驚いていた。

ダンは笑顔で答えた。

「今日は父さんと母さんの命日だろ。だからそういう日ぐらいはしつかりとな。」「そうだね。父さんと母さんの命日だもんね。」

ルキアは笑顔で話した。

二人は家を出て中心部とは逆の方向へと歩いていった。殺風景な街を抜け数分歩くと海が見える丘へと出た。そしてその丘の付近には多くのお墓があった。

二人はドレイクと書かれているお墓の前に立った。

「兄さん聞いてもいいか。」

ルキアがお墓を見つめながらダンに話しかけた。

「なんだ。」

「父さんと母さんは二人で外に出て行った時、事故で亡くなったんだよね。」

「ああ、そうだ。」

「でも俺はそれが信じられないんだ。」

ルキアがそう言った瞬間ダンはとても驚いた表情になった。

それと同時にダンは、どうしてそう思うのかルキアに聞いた。

ルキアは落ち着いた表情で答えた。

「今までずっと考えてただけど、兄さんには言いずらかった。俺が思うに、父さんと母さんは誰かに殺されたんじゃないかとおもうんだ。実際、その事故のことが記事になってないし、それを目撃した人がいないじゃないか。」

そうルキアが言うとダンは強く否定した。

「事故で死んだんだ。」

「でも……。」

ルキアがまた言おうとしたが、ダンはそれをかき消すように事故だ

と言った。

ルキアはそれ以上何も言えなかった。

その後二人は会話を交わさずにお墓を去った。お互いが暗い顔をしながら家に向かっていた。家の前に着くと、ルキアが口を開いた。

「兄さん。俺いつもの場所に行つてくる。」

いつもの場所とは、ラクティスから離れた場所にある草原のことである。ルキアはほぼ毎日この草原に行っている。

「わかった。気をつけて帰ってこいよ。」

ダンはそう言つて家に入つていった。

ルキアは誰もいない草原に横になった。

この草原に着いた頃には既に夜になっていた。

涼しい風が吹き、星が輝いていた。

ルキアは星を眺めながらまた両親のことを考えていた。

その時空が光つたように見えた。

「昨日と一緒だ。」

ルキアは呟いた。そして目を擦つてからまた空を見た。

昨日とは変わり、今日ははっきりと見えた。何度も光を放ち、流れ星だとルキアは思った。

少しの間ルキアはその流れ星を眺めていた。

すると一つの光がルキアのいる草原に落ちた。

ルキアは驚いて立ち上がった。そしてその光が落ちた場所へと駆け寄った。

その光は草原に大きな穴を造っていた。

それと同時に辺りに吹いていた風が一瞬に止まなくなった。

ルキアは不思議に思い辺りを見回した。

だが特に異変はなかった。

もう一度ルキアは落ちてきた光を見た。

その瞬間光は一瞬にして消え巨大なブラックホールのような空間を作り出した。

ルキアに強風が襲いあつという間に空間に吸い込まれてしまった。

「なんだよこれ。わゝゝ。」

ルキアが叫んでも何も変わることがなく、ただ吸い込まれていくだけだった。

「父さん、母さん…兄さん…。」

ルキアはゆっくりと目を開けた。

「ここは。えっ。」

そこには今まで暮らしていた場所には在るはずのない景色が広がっていた。

てっぺんが見えない樹齢数百年はいつているだろうと思われる大木が数え切れない程ありジャングルのようになっていた。鳥や動物の鳴き声がいたるところから聞こえていた。

ルキアはただ啞然とするしかなかった。

出逢い（前書き）

目の前を流れていた流れ星
星に飲み込まれたルキア

謎の土地

ルキアはまだ何も知らない
これから何が起るのか
ルキアはまだ何も出来ない
力を得ていないから

これから何が起こり、何を知るのか
運命は誰に味方するのか…

出逢い

鳥や動物達の鳴き声が絶えず聞こえてくる。人の気配は感じられなかった。

ルキアは進行を妨げる草や枝を手でどかしながら歩いた。

額に少し汗が流れていたが気にせず、辺りを見回しながらここが何処なのかを調べていた。

「早くこのジャングルみたいな場所を抜け出さないと…。」

ルキアはそう言いながら歩いていると正面に今まで歩いていたジャングルのような場所とは明らかに違う光景が見えてきた。

ルキアはその光景を見て呟いた。

「あれは…遺跡…。」

ジャングルのような場所を抜け遺跡の前でルキアは立ち止まった。その遺跡は10メートル以上の高さがあり、明らかに数百年は経っているだろうと思われる。人の気配は全くなく、遺跡は土をかぶり雑草が生い茂っている。

ルキアは何の迷いもなくその遺跡の中へと入った。

遺跡の内部も外見通り雑草が生い茂っていて、とても古びていた。ルキアはこの遺跡を細かく調べていた。そして気付くと外が暗くなり始めていた。

「今日はこの遺跡で休もう。」

呟きながら、少しでも綺麗で眠れる場所を見つけその場に横になった。

遺跡を調べてわかったことは食事をした形跡がわずかながらあり、このジャングルのような場所の中で食料が手には入ること、またそれと同時に動物の骨もいくつかあり、狂暴な動物がいる可能性があるということ。

結局この二つしか分からなかった。というのも手掛かりは他にもあ

った。壁に文字が彫られていたり、石柱に絵が描かれていたりした。しかしどれ一つとして解読することが出来なかったのだ。

ルキアは少し横になってから、またジャングルのような場所へ行き、食料を探した。歩いて数分もしないうちにフルーツなどを見つけ、手に持てるだけ持ち遺跡へ戻った。

遺跡へ戻ったルキアはすぐに取ってきたフルーツを食べ、また横になった。

そして考えごとをしているうちに眠りについていた。

ルキアが目を覚めたのは、遺跡の外から大きな音が聞こえたときだった。

「なんだよ今の音。」

驚きながら言った。

ルキアは辺りを見回しながら慎重に外に出た。

外は既に朝を迎えていて、小鳥達のさえずりが聞こえていた。

ルキアは外に出て迷わずジャングルのような場所の中へと入り音の原因を探した。

数分歩くと目の前に音の原因が現れた。

それは、少し大きめな穴だった。

ルキアがその穴の中を覗くと、そこにはルキアより少し年上の傷だらけの女性が気絶していた。

それを見たルキアは、すぐに女性の下に駆け寄り声をかけた。

しかしなんの応答もなかった。

ルキアは少し考えた結果その女性を抱え今までいた遺跡へと戻った。

傷だらけの女性が目を覚ましたのは次の日の朝だった。

「気付いたか。」

ルキアが声をかけた。

「ここは…。」

女性は辺りを見回しながら言った。

「どこかの遺跡だ。俺は知らない。むしろあんたの方が知っているじゃないか。」

「遺跡…。」

女性はそう言いながらまだ辺りを見回していた。

すると数秒後、女性は急に立ち上がった。しかも先程までの元気のない顔とは打って変わり険しい顔になっていた。

「名前が分からないが助けてくれたこと感謝する。ありがとう。だがこれで失礼する。」

女性はそう言いながら歩き出した。

ルキアはそれを聞き慌てて声をかけた。

「待ってくれ。俺はあんたに聞きたいことが山ほどある。教えてくれ。」

ルキアの声に女性は立ち止まり振り返った。そして助けてくれたことへの礼として答えてくれることになった。

「ここは何処なんだ。」

ルキアがまずこの質問をすると女性は驚いた顔をした。

「もしかして…。」

女性がかすかに呟いた。

ルキアはそれを聞き逃さなかった。

「もしかしてってなんだよ。」

女性は冷静に話し出した。

「それに答えるには質問がある。お前はここへどうやって来た。」
ルキアは星を見ていた時の話、訳も分からずこの遺跡にたどり着いたことを話した。

「そういうことが。」

女性は理解するとここについて話し出した。

今ルキアがいる場所はヒドンゲートという島。ここには名前からも解るように秘密の扉（隠された扉）が隠されている。この島の大きさは国で例えればオーストラリアほどの大きさである。またその扉を見つぐり抜けるとさらに大きな島へとつながっている。大きさは、南北アメリカ大陸を足した広さである。そしてその島の名前は『フェイチャー』

「この島についてはこんなところだ。」
女性は言った。

「この島のことは少しわかった。だが今の話だとこのヒドンゲートから出られないみたいなお話じゃねえかよ。」

ルキアは少し慌てながら聞いた。

「お前は勘がよくて助かるよ。その通りだ。ヒドンゲートから出ることは出来ない。扉を見つめるか死ぬかだ。」

「死ぬなんて大袈裟な。」

「いや、死ぬ。扉を見つけれないような弱い奴はな。」

ルキアはそれから黙ってしまった。

その間女性は遺跡を調べていた。

ルキアが口を開いたのは、お昼過ぎだった。

「さつきから何をしてるんだ。この遺跡なら俺が既に調べた。」
女性は何も言わずにただ壁を叩いていた。

ここで死ぬ奴には言っても無駄ということか…とルキアは思った。
そう思うと同時に決心がついた。

「なあ、俺はここで死にたくない。俺の力を必要としている兄貴だ
つている。こんな所でくたばるくらいなら死に物狂いで何でもやっ
てやる。頼むあんたと一緒に俺を連れてってくれ。」

「その言葉を待っていた。まあ言わなくても連れていったがな。お
前は特別だから。」

女性は笑いながら答えた。

ルキアは特別という言葉が引つ掛かり、女性に聞き返したが女性は
後で分かったと言った。

「名前を言ってなかったな。私はサラ・ノワールだ」

「俺はルキア・ドレイク。よろしく。」

「これから共に旅をすると決まったからには、まずは基礎修行から
だ。フェイチャーでの話は後からだ。」

サラがそう言うのとルキアは少し啞然とした。

「修行…。」

「当たり前だ。このままだとお前は私がいても死ぬぞ。」

サラは真顔でルキアに言った。

「わかったよ。何でもやってやる。」

ルキアが叫んだ。そして修行が始まった。

始まった旅路（前書き）

太陽が昇り動きだす。太陽が下がり家に帰る。
それが今までの生活だった。

同じことの繰り返し、それが純粹に楽しくもあつた。
ましてや旅をするなど考えたこともなかった。

俺は必ず勝つてみせる。

小さな幸せのために…。

始まった旅路

ルキアとサラが出逢った日からちょうど1ヶ月が経ったその日は雨だった。

朝が訪れても鳥達が鳴くことはなく、雨音だけが聞こえる静かな日だった。

そんな雨の日でも森を歩く二人組の姿があった。

「今日で丸二日。誰とも会わないな。」

左腰に刀を装備し、マントのようなものを羽織っている青年が、隣を歩いている青年よりも少し年上で、背中に大きな刀を背負った容姿端麗な女性に話しかけた。

「会わなくていい。戦うことになっても面倒だしな。まあお前は力を試したいのだろうがな。」

女性は少し笑いながら話した。

「サラのおかげで俺も大分強くなったからな。」

「私もあの泣き虫ルキアがこんなにも成長するなんて。」

サラという女性が話す。

「一度も泣いてねえよ。」

ルキアという青年はサラに向かって今までより大きな声で言った。

二人がそんな話をしていると正面にジャングルからは程遠いような建物が見えてきた。

それは数回建てのビルやコンクリートなどで造られた住居などでもはや一つの街だった。

ルキアは自分が住んでいた街のようだと思いながら、その街に入っていた。しかし見た目とは裏腹に二人が街に入ると全く人の気配が感じられなかった。

「なんだここは。急に発展している場所が出てきたと思ったら、人っ子一人いないじゃねえかよ。」

ルキアはため息をつきながら辺りを見渡した。

しかし人っ子一人いないはずの街はなぜかとても綺麗で、整備が行き届いていた。

「サラはここには来たことあるのか。」

ルキアはサラに聞いた。

「ああ。ここはビクターという街だ。別名物資の街と呼ばれている。

」

ビクター

物資の街とも呼ばれている。この街には人が住んでいない。しかし、不思議なことに整備が行き届いていて、旅に必要な物を簡単に手に入れることが出来る。

しかも無くなることがない。

「そんな良い街があるとはな。」

ルキアはサラの話を聞いて感心していた。

サラは最後に付け足して言った。

「誰かと会う可能性は各段に上がる。注意を怠らないことだな。」

ルキアはうなずきながら歩みを進めた。

その後のサラの話ではここで旅の荷物を買い込み、今日はここに泊まっていくということだった。

二人はあるビルで旅に必要な物を買い込み外に出ようとしていた。

しかし二人は急に立ち止まり、またビルの中へと戻った。そしてそのまま階段を上り二階へと行った。

「何人が分かるかルキア。」

「ああ。二人組だ。」

「正解だ。見えたぞ。」

二人は姿を隠し窓ガラスから外を覗いた。

ルキア達が来たジャングルの方向から男二人組が姿を表した。
一人は細身で長身の男、もう一人は筋肉質で強面の男だった。
辺りを見回しながら何かを話していた。そして長身の男は近くにあった建物の中に入っていく、筋肉質の男はその正面の建物の中に入っていた。

「サラこれからどうする。」

ルキアは男達の方を見ながらサラに聞いた。

「あいつらはおそらくここが何処なのかを知っている。」

ルキアは驚きながら何故それが分かるのかを聞いた。

「あいつらは二人組だ。そして互いに別々の場所に入っていた。何があるか分からない場所、つまり初めての場所の場合は、別れて行動しないはずだ。逆に言えばそこがチャンスだ。」

ルキアは頷いて答えた。

そして二人は急いで外に出て、長身の男が入っていたビルに入った。

ビルの中には棚が立ち並びそこには医療品が置かれていた。

どうやら細身の男はそれを目的にこのビルに入ったと考えられる。

ルキアとサラが中に入ると細身の男の姿は見当たらなかったが、気配は感じていた。

二人はそれを感じ取るとすぐさま二手に分かれ動き出した。
しかしその瞬間だった。

「そこまで動くな。」

ルキアはその声を聞くと同時にサラを見た。

そこには強面の男がサラに銃を突きつけていた。

「サラ！！！」

ルキアは叫んだ。

「おっと、こっちの坊やも動くなよ。」

ルキアの後ろから細身の男が銃を突きつけながら歩いてきた。顔には余裕の表情が表れていた。

「僕達が君達二人に気付いていないとでも思ったかい。むしろ罠に引っ掛かったのは君達だ。僕の予想通りに動いてくれた。」

細身の男は笑いながら言った。そして続けた。

「ここからが本題だ。君達は参加者かい。それとも参加希望者かい？」

「おい、なんだよ。参加とか参加希望とか。」
ルキアが叫んだ。

すると男二人は顔を見合わせ、にやりと笑った。

「そうか、招かざる客か。僕達は大当たりだ。こんな機会は滅多にない。でもおかしいよね？ 招かざる客なら、なぜ武器を持っているのかな。」

細身の男はそう言いながらルキアの武器を取ろうとした。

ルキアはその瞬間空中に飛び上がり体を反転させ、細身の男が持っている銃を目掛けて蹴りをくらわせた。それと同時に剣を抜き細身の男に向けた。

それはほんの一瞬の出来事だった。

そしてそれを見ていたサラはすぐさま強面の男の顔面に肘をくらわせ、ひるんだ隙に足をかけ、背中にある剣を抜き、強面の男に向けた。

これも一瞬の出来事だった。

今では完全に立場が逆転してしまっている。

「油断したね。まあ、俺達はこの狙いだっただけだね。」
ルキアが細身の男に対して言った。

「ルキアやるじゃないか。予想以上だ。」

サラは笑いながらルキアに言い、そして続けた。

「さて、お前達二人には用がない。殺すだけだ。」

「やめてくれ。俺達は別に本気じゃないんだ。命だけは…頼む。」
顔に似合わず強面の男が頭を下げて頼んでいる。

「駄目だ…。ルキアお前も殺れ。」サラは表情一つ変えずに言った。
そして二人は剣を振り上げ、下ろそうとしたとき、男達二人は既に
気絶していた。

下ろした剣は男達の真横を通り過ぎ地面に当たった。

「やっぱり気絶しちゃったな。」

ルキアは呆れながらサラに言った。

「この先がこんな奴らばかりなら楽なのだな。」
ため息をつきながらサラが言った。

ルキアとサラは荷物をまとめ、ホテルから出て来た。

昨日の雨とは真逆の快晴だった。

辺りは完璧に整備が行き届いていた。

そしてホテルの入り口には、細身の男と強面の男がロープで縛られていた。

「こいつらどうするんだ。」

ルキアは男達二人を見ながらサラに聞いた。

「そのままだ。どうなるか私には分からんがな。」

サラはそう言くと、さっさと歩いて行ってしまった。

ルキアは少し悲しそうな顔でサラを追いかけた。

「ルキア。変な同情はしないことだ。命を懸けていることを忘れるな。」

「わかってるよ。」

二人はビクターを出て、また森の中に入っていった。

「それにしてもあの時の演技はうまかったな。『参加とか参加希望って何だよ』だったか。」

サラが笑いながらルキアに言った。

「当たり前だろ。俺を誰だと思ってる。」

ルキアが自信満々に言うつとサラは無視して歩き出していた。

「おい。無視すんなよ。」

ルキアは慌ててサラを追いかけた。

誰にも出会わず三時間ほど歩くと川が見え、二人は早足でそこに向かった。

「よし、ここで休もう。」

サラがそう言つて座ろうとすると、ルキアが何かを見つけ嬉しそうに指を指して言った。

「サラ、あそこに滝がある。あそこで休もう。」サラは分かったと言つて滝の方へ歩き出した。

その時ルキアは既に走り出していた。

『おもしろい子連れがいるね。』

サラの後ろから声が聞こえた。

サラはすぐさま振り返った。

すると森の中から一人の男が歩いてきた。

「誰だ。」

サラが叫んだ。

しかし心の中で思っていた。

『私が気配に気付かないなんて、こいつは…。』

「言ってもいいけど、その前に質問をしてもいいかな。」

男は笑顔でサラに聞き、そして続けた。

「あつ、でも返答次第では君達を壊すけどね。」

不気味な笑顔だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4247n/>

フェイチャー

2011年10月7日06時37分発行